

次郎五郎の滝つば

むかし、川角に年老いた猟師の夫婦が住んでいました。若いときには子供に恵まれませんでした、年を取ってから男の子が二人生まれました。兄を次郎、弟を五郎と呼んでいました。お爺さんは成長した二人の子供を連れて、自慢の鉄砲で鳥や獣を射止めるため山野を歩いていました。ある年、お爺さんは世にも珍しい大鹿を射止めました。

「なんと普通の鹿の倍以上もある大鹿だったげな」

「皮をはいで広げたら六畳の部屋一杯あったそうな」

と近郷の大評判になり、わざわざ見に来る人がありました。

その年の暮れから翌年にかけて、お爺さんは身体の調子が悪くなり、身体中に鹿の角に似た腫れ物ができる病気にかかり、苦しみながら死んでしまいました。

次郎、五郎の二人の子供は村の人たちの勧めもあって猟師の仕事を続けることにしました。兄弟が協力し合って猟をするので、田畑を荒らしていた鹿や猪やウサギが少なくなり、川角から日浦畑の方の人達からも喜ばれていました。おじいさんがなくなって三年の月日が経ったある秋のことでした。

「今日は天気もいいし、収穫があるぞ」

と二人は勇んで出かけました。

しかし、どうしたことが、その日に限ってウサギ一匹見当たりません。

「おかしいのお、窓が山から魚切の方へ行ってみよう」

と二人は足を速めました。窓が山の山すそまでたどり着くと、二頭の小鹿を見つけました。しかも、珍しい白鹿です。



「おい、可愛い小鹿じゃ、生け捕りにしようや」

と二人は両側から追い討ちをかけるように、あとをつけましたが、一頭は見失ってしまいました。もう一頭のあとを追って二人は山深く入って行きました。

山へ追われた小鹿は、今度は谷間のほうへ一目散に逃げました。川沿いで追い詰められた小

鹿は、ある大岩の上をかけ上ったと見ると急に姿を消してしまいました。その岩の反対側は急な絶壁になっており、その下は深い滝つぼになっていました。

「大岩の上に追い詰めたぞ。反対側にうずくまっているはずだ、それ」
と岩にかけ上りましたが、二人とも勢い余って滝つぼに落ち中へ吸い込まれてしまいました。そのまま、鹿も兄弟も上がってはきませんでした。

それから何年か経ちました。その頃この滝つぼに大きな鯉が二匹泳いでいるのを見かけるようになりました。村の人たちは「この鯉は兄弟の化身」と信じ、この滝つぼを「次五郎の滝」と呼ぶようになりました。